



Adobe

Solution Accelerator の インストールおよびデプロイ

2010年9月24日

バージョン 9.5

© 2010 Adobe Systems Incorporated and its licensors. All rights reserved.

Solution Accelerator のインストールおよびデプロイ
2010 年 9 月 24 日

This guide is licensed for use under the terms of the Creative Commons Attribution Non-Commercial 3.0 License. This License allows users to copy, distribute, and transmit the guide for noncommercial purposes only so long as (1) proper attribution to Adobe is given as the owner of the guide; and (2) any reuse or distribution of the guide contains a notice that use of the guide is governed by these terms. The best way to provide notice is to include the following link. To view a copy of this license, visit <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>.

Adobe, the Adobe logo, Flash Builder, and LiveCycle are either registered trademarks or trademarks of Adobe Systems Incorporated in the United States and/or other countries. IBM and AIX are trademarks of International Business Machines Corporation in the United States, other countries, or both. Linux is the registered trademark of Linus Torvalds in the U.S. and other countries. Microsoft and Windows are either registered trademarks or trademarks of Microsoft Corporation in the United States and/or other countries. Oracle, Sun and Solaris are trademarks or registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. All other trademarks are the property of their respective owners.

Adobe Systems Incorporated, 345 Park Avenue, San Jose, California 95110, USA.

目次

このドキュメントの内容	5
このドキュメントの内容	5
このドキュメントの対象読者	5
このドキュメントで使用する表記	5
1 インストールとデプロイメントの概要	7
Solution Accelerator の概要	7
Solution Accelerator のインストール	7
新しいシステムへの Solution Accelerator のインストール	7
LiveCycle ES2.5 へのアップグレード	8
次の手順	8
2 Solution Accelerator のインストール	9
インストーラの確認.....	9
製品ファイルのインストール	9
次の手順.....	10
3 Solution Accelerator の設定およびデプロイ	11
LiveCycle Configuration Manager の実行	11
Solution Accelerator の画面の設定	11
Solution Accelerator の選択	12
Configure Datasource JDBC Driver Classpath for Solution Accelerators (WebLogic のみ)	12
Package JDBC Modules for Solution Accelerators into LiveCycle ES2 EARs (1(b) of 2) (WebLogic のみ)	12
Package JDBC Modules into LiveCycle ES2 EARs (2 of 2) (WebLogic のみ)	13
Datasource Configuration - Solution Accelerator (WebLogic と WebSphere のみ)	13
Correspondence Management	13
Managed Review & Approval.....	14
Solution Accelerator の依存関係	15
Solution Accelerator のデプロイメントの検証.....	15
次の手順.....	15
4 デプロイメント完了後の作業	16
Correspondence Management.....	16
ユーザーロール.....	16
サンプルユーザー.....	17
権限	17
Interactive Statements	19
サンプルの Finance Corp ソリューションテンプレートを使用する準備	19
Finance Corp ソリューションテンプレート用の EAR の設定	20
Flash Builder プラグインのインストール	20
Flex 3 SDK のインストール	21
BatchProcessor サービスでの XA データソースの使用の設定	21
SQL Server での XA データソースの使用の設定	22
Managed Review & Approval	22
電子メールサービスの設定	22
複数のスキーマの設定 (DB2 のみ)	23
Solution Accelerator のアンインストール	23

5	トラブルシューティング	24
	Interactive Statements.....	24
	runJDBCcursorJob サービスでエラーが発生する.....	24
	実行時間が 20 分を超えたスレッドが WebLogic によって停止される.....	24
	Correspondence Management.....	25
	サーバーログに不必要なメッセージが書き込まれる (WebSphere のみ).....	25
A	付録 - データソースの手動設定	26
	JBoss での Solution Accelerator 用 XA データソースの作成.....	26
	adobe-sa-ds.xml ファイルの作成.....	26
	WebLogic での Solution Accelerator 用 XA データソースの作成.....	28
	Oracle データベース接続の設定.....	28
	Oracle 用の新しいデータソースの作成.....	28
	接続プールの設定.....	29
	MySQL データベース接続の設定.....	30
	DB2 データベース接続の設定.....	30
	DB2 データベースドライバのインストール.....	30
	WebLogic 10g 上の DB2 の新しいデータソースの作成.....	30
	DB2 に対する接続プールの設定.....	32
	SQL Server データベース接続の設定.....	32
	SQL Server データベースドライバのインストール.....	32
	クラスパスへの sqljdbc.jar ファイルの追加.....	32
	SQL Server 用の新しいデータソースの作成.....	33
	接続プールの設定.....	33
	WebSphere での Solution Accelerator 用 XA データソースの作成.....	34
	データソース用の J2C 認証の設定.....	34
	DB2 データソースの作成.....	34
	DB2 JDBC プロバイダの作成.....	34
	DB2 JDBC XA データソースの作成.....	35
	AdobeDefaultSA_DS 接続プールの設定.....	36
	デフォルトの分離レベルの設定 (DB2 のみ).....	37
	SQL Server データソースの作成.....	37
	SQL Server JDBC プロバイダの作成.....	37
	SQL Server XA データソースの作成.....	38
	AdobeDefaultSA_DS 接続プールの設定.....	40
	Oracle データソースの作成.....	40
	Oracle JDBC プロバイダの作成.....	40
	Oracle XA データソースの作成 :.....	40
	AdobeDefaultSA_DS 接続プールの設定.....	41

このドキュメントの内容

このドキュメントでは、Solution Accelerator のインストール、設定およびデプロイについて説明します。Solution Accelerator および構築ブロックについては、「[Solution Accelerator](#)」と「[LiveCycle ES2](#)」の Web サイトを参照してください。

このドキュメントの内容

このガイドでは、次の Solution Accelerator を Microsoft® Windows®、AIX®、Linux® および Solaris® でインストールおよび設定する方法と、JBoss®、WebSphere® および Weblogic® Application Server にデプロイする方法について説明します。

- Correspondence Management Solution Accelerator 9.5
- Interactive Statements Solution Accelerator 9.5
- Managed Review & Approval Solution Accelerator 9.5

このドキュメントの対象読者

このガイドで提供される情報は、Solution Accelerator のインストール、設定およびデプロイを担当する管理者や開発者を対象にしています。このガイドで扱う内容は、LiveCycle をインストールして使用している読者を想定しています。

このドキュメントで使用する表記

このドキュメントで使用する一般的なファイルパスの命名規則は、次のとおりです。

名前	デフォルト値	説明
[LiveCycleES2 root]	Windows : C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2\ AIX、Linux および Solaris : /opt/adobe/adobe_livecycle_es2/	すべての LiveCycle ES2 モジュールで使用するインストールディレクトリ。インストールディレクトリには、Adobe LiveCycle Configuration Manager 用のサブディレクトリがあります。このディレクトリには、サードパーティ製品に関連したディレクトリも含まれます。 注意： このドキュメントでは、LiveCycle ES2 は LiveCycle ES2 SP2 以降のバージョンを表します。

名前	デフォルト値	説明
[appserverdomain]	<p>WebLogic 10g Server (Windows) : C:¥bea¥user_projects¥domains¥ base_domain</p> <p>WebLogic 11g Server (Windows) : C:¥Oracle¥Middleware¥ user_projects¥domains¥ base_domain</p> <p>WebLogic 10g Server (Linux および UNIX) : /opt/bea/user_projects/domains/ base_domain</p> <p>WebLogic 11g Server (Linux および UNIX) : /opt/Oracle/Middleware/ user_projects/domains/ base_domain</p>	WebLogic Server で設定したドメイン。
[JBoss Home]	<p>JBoss Application Server (Windows) : C:¥jboss</p> <p>JBoss Application Server (Linux) : /opt/jboss</p> <p>Windows 上の JBoss Enterprise Application Platform : C:¥jboss-eap-4.3¥jboss-as</p> <p>Linux および Solaris 上の JBoss Enterprise Application Platform : /opt/jboss-eap-4.3/jboss-as</p>	LiveCycle ES2 サービスを実行する JBoss アプリ ケーションサーバーのホームディレクトリ。

このガイドに記載されているディレクトリの場所に関するほとんどの情報は、すべてのプラットフォームに当てはまります (AIX、Linux および Solaris では、すべてのファイル名とパスにおいて大文字と小文字が区別されます)。プラットフォーム固有の情報は、必要に応じて特記します。

1.1 Solution Accelerator の概要

Solution Accelerator は、開発時間を短縮し、品質を向上するための、拡張およびカスタマイズが可能なソリューションです。再利用可能なコンポーネントとテクニカルガイドで構成される、実稼働対応の構築ブロックのセットと共にパッケージングされています。

Solution Accelerator インストーラの一部として、次の Solution Accelerator を使用できます。

- **Managed Review & Approval**：構造化された監査レビューおよび承認のソリューションを開発するための、再利用可能な Adobe® Review, Commenting and Approval Building Block 9.5 を提供します。
- **Correspondence Management**：顧客に対応するエージェントが定義済みのコンテンツフラグメントを使用して個人向けの顧客対応を作成できるようにします。
- **Interactive Statements**：顧客がビジネスと直接やり取りできるインタラクティブステートメントを作成できます。

1.2 Solution Accelerator のインストール

Solution Accelerator をインストールするには、Adobe LiveCycle ES2 Service Pack 2 が必要です。Solution Accelerator をインストールする場合は、LiveCycle のインストーラを次の順序で実行する必要があります。

1. LiveCycle ES2 バージョン 9.0 をインストールします。詳しくは、[LiveCycle ES2 インストールガイド](#)を参照してください。
2. LiveCycle ES2 SP2 バージョン 9.0.0.2 をインストールします。詳しくは、『[LiveCycle ES2 Service Pack 2](#)』を参照してください。

注意：ダウンロードサイトには、LiveCycle ES2 SP2 の一部として、LiveCycle Workbench 9.5 のインストーラが用意されています。LiveCycle Designer ES2 バージョン 9.0.0.2 は、LiveCycle Workbench 9.5 の一部としてインストールされます。

3. Solution Accelerator バージョン 9.5 をインストールします。詳しくは、このドキュメントを参照してください。

1.2.1 新しいシステムへの Solution Accelerator のインストール

LiveCycle と Solution Accelerator の新規インストールを計画している場合は、LiveCycle Configuration Manager の実行回数を減らすことで、インストールを簡略化できます。インストールを簡略化する手順は次のとおりです。

1. LiveCycle ES2 をインストールします。LiveCycle Configuration Manager は実行しないでください。
2. LiveCycle ES2 SP2 をインストールします。LiveCycle Configuration Manager は実行しないでください。
3. Solution Accelerator をインストールします。
4. LiveCycle Configuration Manager を実行して、システムの設定、デプロイおよびブートストラップを行います。

1.3 LiveCycle ES2.5 へのアップグレード

LiveCycle 7.x または LiveCycle 8.x から LiveCycle ES2.5 にアップグレードする場合は、まず LiveCycle ES2 サービスパック 2 以降にアップグレードする必要があります。

LiveCycle 7.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードについて詳しくは、『[LiveCycle 7.x サーバーから LiveCycle ES2 へのアップグレード](#)』を参照してください。

LiveCycle 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードについて詳しくは、使用しているアプリケーションサーバー版の『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレード](#)』を参照してください。

パッチアップデート、テクニカルノート、追加情報について詳しくは、[LiveCycle テクニカルサポート](#)を参照してください。

1.4 次の手順

LiveCycle ES2 サービスパック 2 以降をシステムにインストールしたら、Solution Accelerator のインストールおよびデプロイが可能になります。

このドキュメントでは、Solution Accelerator を LiveCycle ES2 サーバーでインストール、設定およびデプロイする方法について説明します。また、Solution Accelerator を使用するために必要なデプロイメント完了後の作業およびトラブルシューティングのヒントについても説明します。

- [「Solution Accelerator のインストール」 \(9 ページ\)](#)
- [「Solution Accelerator の設定およびデプロイ」 \(11 ページ\)](#)
- [「デプロイメント完了後の作業」 \(16 ページ\)](#)
- [「トラブルシューティング」 \(24 ページ\)](#)
- [「付録 - データソースの手動設定」 \(26 ページ\)](#)

2

Solution Accelerator のインストール

Solution Accelerator をインストールおよび設定するには、製品ファイルをインストールすることと、LiveCycle Configuration Manager を実行して Solution Accelerator をデプロイすることが必要です。

注意： Solution Accelerator をインストールおよびデプロイするシステムでは、LiveCycle ES2 Service Pack 2 以降を実行している必要があります。

LiveCycle ES2 サーバーのインストールおよびデプロイに関する完全なドキュメントについては、[LiveCycle ES2 ドキュメント](#)を参照してください。

2.1 インストーラの確認

入手したインストールメディアが破損していないことを確認します。Solution Accelerator をインストールするコンピュータのハードディスクにインストーラのメディアコンテンツをコピーする場合は、必ず、すべての DVD コンテンツをハードディスクにコピーしてください。

ヒント： インストールエラーを避けるには、Windows のパスの最大長を超えるディレクトリパスに DVD インストールイメージをコピーしないでください。

アドビの Web サイトからインストーラをダウンロードした場合は、MD5 チェックサムなどのシステムユーティリティを使用してインストーラファイルの整合性を検証してください。Adobe LiveCycle MD5 チェックサムコードについては、[ここ](#)をクリックしてください。

注意： 抽出したインストールパッケージのディレクトリ構造は、絶対に変更しないでください。

2.2 製品ファイルのインストール

ここでは、Solution Accelerator 製品ファイルの初期インストールについて説明します。設定およびデプロイメントについて詳しくは、[「Solution Accelerator の設定およびデプロイ」\(11 ページ\)](#)を参照してください。

注意： インストール中に「キャンセル」をクリックすると、いつでもインストーラを終了できます。ただし、既にインストールされたファイルは自動的に削除されません。手動で削除するか、Solution Accelerator アンインストールを実行できます。詳しくは、[「Solution Accelerator のアンインストール」\(23 ページ\)](#)を参照してください。

1. インストールプログラムを起動します。

● (Windows) 次のいずれかを実行します。

- livecycle_SA ディレクトリに移動して、run_windows_installer.bat ファイルを起動します。バッチファイルによって、Windows のバージョンに適したインストーラ (32 ビット版または 64 ビット版) が起動されます。
- ハードディスク上にあるインストーラのコピー先ディレクトリに移動して、install.exe ファイルをダブルクリックします。

(Windows 32 ビット版) %livecycle_SA%Disk1%InstData%Windows%VM

(Windows 64 ビット版) %livecycle_SA%Disk1%InstData%Windows_64%VM

注意： 64 ビット版のプラットフォームでは、必ず 64 ビット版のインストーラを実行してください。

- (AIX、Linux、Solaris) 適切なディレクトリに移動して、コマンドプロンプトから `./install.bin` を実行します。
 - (AIX) `/livecycle_SA/Disk1/InstData/AIX/NoVM`
 - (Linux) `/livecycle_SA/Disk1/InstData/Linux/NoVM`
 - (Solaris) `/livecycle_SA/Disk1/InstData/Solaris/NoVM`
- 注意：** AIX、Linux および Solaris の場合は、インストールファイルに実行権限を設定する必要があります。
2. プロンプトが表示されたら、インストールプログラムで使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
 3. はじめに画面で「次へ」をクリックします。
 4. Solution Accelerator の使用許諾契約書を読み、「使用許諾契約書の条件に同意します」を選択して契約書の条項に同意し、「次へ」をクリックします。
 5. フォルダ選択画面で、LiveCycle ES2 のインストール場所を指定して、「次へ」をクリックします。
 6. デフォルトでは、使用可能な Solutions Accelerator がすべて選択されています。インストールしないものを選択解除して、「次へ」をクリックします。
 7. (自動のみ) Solution Accelerator データソースのパスワードを指定します。このパスワードは、Solution Accelerator から Solution Accelerator データベースに接続する際に使用します。
 8. インストール前の概要を確認し、「インストール」をクリックして、選択した Solution Accelerator をインストールします。
 9. Adobe LiveCycle ES2.5 リリースノートを確認し、「次へ」をクリックします。
 10. インストール完了画面の情報を確認します。
 11. 「LiveCycle Configuration Manager を起動」チェックボックスはデフォルトで選択されています。「完了」をクリックして LiveCycle Configuration Manager を実行します。
- 注意：** LiveCycle Configuration Manager を後で実行するには、「完了」をクリックする前に、「LiveCycle Configuration Manager を起動します」オプションの選択を解除します。[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin ディレクトリにある該当するスクリプトを使用して、LiveCycle Configuration Manager を後で起動することができます。[「Solution Accelerator の設定およびデプロイ」\(11 ページ\)](#) を参照してください。

2.3 次の手順

LiveCycle Configuration Manager を使用して Solution Accelerator を設定します。詳しくは、[「Solution Accelerator の設定およびデプロイ」\(11 ページ\)](#) を参照してください。

3

Solution Accelerator の設定およびデプロイ

Solution Accelerator をインストールしたら、LiveCycle Configuration Manager を実行してインストールを設定する必要があります。LiveCycle Configuration Manager では、アプリケーションサーバーにデプロイするために EAR ファイルで LiveCycle ES2 モジュールを設定し、LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイします。

Solution Accelerator をインストールしていない場合は、[「Solution Accelerator のインストール」 \(9 ページ\)](#) を参照してください。

注意： LiveCycle ES2 サーバーを設定するための LiveCycle Configuration Manager 画面のほかにも、システムにインストールされている Solution Accelerator に固有の画面が表示されます。詳しくは、[「Solution Accelerator の画面の設定」](#) を参照してください。

注意： Solution Accelerator は、LiveCycle ES2 の特定のモジュールおよびタスクに依存します。LiveCycle Configuration Manager を実行しているときは、これらのモジュールおよびタスクが選択されていることを確認する必要があります。詳しくは、[「Solution Accelerator の依存関係」 \(15 ページ\)](#) を参照してください。

3.1 LiveCycle Configuration Manager の実行

インストールタイプ、アプリケーションサーバーおよびサーバー設定（シングルまたはクラスタ）に応じて、次のドキュメントで説明されている手順で LiveCycle ES2.5 を設定します。

- **自動インストール**
 - [『LiveCycle ES2 の自動インストールおよびデプロイ \(JBoss 版\)』](#)
- シングルサーバーの設定
 - [『LiveCycle ES2 のインストールおよびデプロイ \(JBoss 版\)』](#)
 - [『LiveCycle ES2 のインストールおよびデプロイ \(WebLogic 版\)』](#)
 - [『LiveCycle ES2 のインストールおよびデプロイ \(WebSphere 版\)』](#)
- **クラスタサーバーの設定**
 - [『LiveCycle ES2 アプリケーションサーバークラスタの設定 \(JBoss 版\)』](#)
 - [『LiveCycle ES2 アプリケーションサーバークラスタの設定 \(WebLogic 版\)』](#)
 - [『LiveCycle ES2 アプリケーションサーバークラスタの設定 \(WebSphere 版\)』](#)

3.1.1 Solution Accelerator の画面の設定

インストールされている Solution Accelerator とアプリケーションサーバーに応じて、Solution Accelerator の設定用の次の LiveCycle Configuration Manager 画面が表示されます。

- [「Solution Accelerator の選択」 \(12 ページ\)](#)
- [「Configure Datasource JDBC Driver Classpath for Solution Accelerators \(WebLogic のみ\)」 \(12 ページ\)](#)
- [「Package JDBC Modules for Solution Accelerators into LiveCycle ES2 EARs \(1\(b\) of 2\) \(WebLogic のみ\)」 \(12 ページ\)](#)
- [「Package JDBC Modules into LiveCycle ES2 EARs \(2 of 2\) \(WebLogic のみ\)」 \(13 ページ\)](#)

- [「Datasource Configuration - Solution Accelerator \(WebLogic と WebSphere のみ\)」 \(13 ページ\)](#)
- [「Correspondence Management」 \(13 ページ\)](#)
- [「Managed Review & Approval」 \(14 ページ\)](#)

3.1.1.1 Solution Accelerator の選択

Solution Accelerator の選択画面では、システムに現在インストールされている Solution Accelerator がすべてデフォルトで選択されています。「次へ」をクリックします。

3.1.1.2 Configure Datasource JDBC Driver Classpath for Solution Accelerators (WebLogic のみ)

注意： この画面は、アプリケーションサーバーの設定の選択画面で「パッケージされた JDBC モジュール」を指定して「データソースを設定」を選択した場合にのみ表示されます。

LiveCycle Configuration Manager では、Solution Accelerator 用のデータソースの保護に使用される JDBC ドライバが反映されるように、LiveCycle サーバーのクラスパスを更新することができます。Configure Datasource JDBC Driver Classpath for Solution Accelerators 画面で次の作業を行います。

- 「DB の種類」ドロップダウンリストからデータベースの種類を選択します。
- JDBC ドライバのパスを指定します。
- 「次へ」をクリックします。

3.1.1.3 Package JDBC Modules for Solution Accelerators into LiveCycle ES2 EARs (1(b) of 2) (WebLogic のみ)

注意： この画面は、アプリケーションサーバーの設定の選択画面で「パッケージされた JDBC モジュール」を指定して「データソースを設定」を選択した場合にのみ表示されます。

LiveCycle Configuration Manager では、JDBC モジュールを設定して、使用しているアプリケーションサーバーに EAR ファイルをデプロイします。Package JDBC Modules for Solution Accelerators into LiveCycle ES2 EARs 画面で次の作業を行います。

- LiveCycle データベースとして使用するデータベースの種類を指定します。
- 接続先のデータベースの名前を指定します。
- データベースサーバーをホストするコンピュータの名前または IP アドレスを指定します。
- データベースサービスへのアクセスに使用するポートを指定します。
- データベースに指定されているデータベースサーバーにアクセスしたユーザーアカウントの名前を指定します。
- データベースに対して指定されているユーザーアカウントのパスワードを指定します。
- アプリケーションサーバーがデータベースへの接続に使用する JDBC ドライバファイルの名前とパスを指定します。リモートアプリケーションサーバーを設定する場合、データベースドライバを含むアプリケーションサーバーのパスを指定します (リモートアプリケーションサーバーからアクセスできるパスを指定する必要があります)。

「データベース接続をテスト」をクリックして、入力した値が有効であることを確認します。必要な情報について詳しくは、**F1** キーを押してください。

注意： テストが失敗した場合でも次の画面に進むことはできますが、「次へ」をクリックする前に、失敗したことを示すメッセージが表示された原因を特定する必要があります。JDBC ドライバがリモートサーバーにある場合、LiveCycle Configuration Manager では JDBC ドライバの場所は検証されません。代わりに、ローカルホストの JDBC ドライバが検証されます。JDBC ローカルドライバが設定されていないためにテストが失敗した場合、リモートパスが正しければ設定は有効になります。

3.1.1.4 Package JDBC Modules into LiveCycle ES2 EARs (2 of 2) (WebLogic のみ)

注意： これは Solution Accelerator に固有の画面ではありません。ただし、Solution Accelerator をインストールしている場合にのみ、次のフィールドが表示されます。

- **暗号化パスワード (SA)：** WebLogic で暗号化された、Solution Accelerator 用の既存のデータソースパスワードを指定します (存在する場合)。
- **Password (SA)：** WebLogic で暗号化された既存のデータソースパスワードがない場合は、暗号化するパスワードを指定します。

その他のフィールドについて詳しくは、**F1** キーを押してください。

3.1.1.5 Datasource Configuration - Solution Accelerator (WebLogic と WebSphere のみ)

注意： この画面は、アプリケーションサーバーの設定の選択画面で「グローバルスコープのデータソース」を指定して「データソースを設定」を選択した場合にのみ表示されます。

Datasource Configuration - Solution Accelerator 画面で次の作業を行います。

- 各フィールドに情報を入力し、「データベース接続をテスト」をクリックします。接続のテストが正常に終了したら、「次へ」をクリックします。

必要な情報について詳しくは、**F1** キーを押してください。

データソースは、Configuration Manager で自動的に設定する代わりに、手動で設定することもできます。自動データソース設定を上書きするには、画面の下で「続行する前に今すぐ手動でデータソースを設定してください」を選択します。Configuration Manager を終了しないでアプリケーションサーバーの管理コンソールにアクセスし、[「付録 - データソースの手動設定」\(26 ページ\)](#) の説明に従ってデータソースを設定します。

注意： 「続行する前に今すぐ手動でデータソースを設定してください」オプションは、自動インストールまたは柔軟な自動インストールでは使用できません。

3.1.1.6 Correspondence Management

Correspondence Management 画面で次の作業を行います。

- Correspondence Management Solution Accelerator で LiveCycle ES2 サーバーへの接続に使用する LiveCycle ES2 サーバーのホスト名または IP アドレスを指定します。デフォルト値は **localhost** です。
- LiveCycle ES2 サーバーのサーバーポートを指定します。
- Correspondence Management Solution Accelerator で使用するアセットのアーカイブを保存するディレクトリを指定します。デフォルトは [LiveCycleES2 root]/cm_data/asset_archive です。

- Correspondence Management Solution Accelerator で一時ファイルを格納するためのディレクトリを指定します。デフォルトは [LiveCycleES2 root]/cm_data/temp です。

注意： asset_archive ディレクトリと temp ディレクトリは Correspondence Management Solution Accelerator のインストール時に自動的に作成されますが、他の既存の場所を指定することもできます。

- 「設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

詳しくは、F1 キーを押してください。

Correspondence Management Solution Accelerator 画面で次の作業を行います。

- 「サンプルユーザーを作成」を選択して、サンプルユーザーと、サンプルドメイン *Finance Corp* を作成します。

注意： 実稼働環境ではサンプルドメインを使用しないことをお勧めします。

- 「ソリューションテンプレートアセットを作成」を選択し、サンプルソリューションテンプレートのアセットをインポートします。
- 「設定」をクリックします。設定中に、Correspondence Management Solution Accelerator によってユーザーロールが作成され、サンプルユーザーに割り当てられます。ユーザーロールと、サンプルユーザーへのユーザーロールのマッピングについては、
- 設定が完了したら、「次へ」をクリックします。

詳しくは、F1 キーを押してください。

3.1.1.7 Managed Review & Approval

Managed Review and Approval を設定画面上：

- レビュー担当者が LiveCycle ES2 サーバーにアクセスするために使用する URL を指定します。
- 「レビュードキュメントの Reader Extensions を設定」を選択して、Adobe Reader を使用した PDF へのコメント機能を有効にします。
- 「Reader Extensions 証明書の Trust Store エイリアス」ドロップダウンリストから Trust Store エイリアスを選択します。実行中の LiveCycle ES2 サーバーで使用可能な Reader Extensions の Trust Store エイリアスがすべて表示されます。

Trust Store エイリアスは、Trust Store Manager で読み込まれた証明書と、Reader Extensions 証明書として設定されている Trust Store の種類に対応する必要があります。詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「Reader Extensions ES2 の設定」を参照してください。

注意： 「レビュードキュメントの Reader Extensions を設定」チェックボックスと「Reader Extensions 証明書の Trust Store エイリアス」ドロップダウンリストは相互に依存しています。つまり、このチェックボックスが有効なときは、Trust Store エイリアスを指定する必要があります。

- 「サンプルユーザーを作成」を選択して、サンプルユーザーと、サンプルドメイン *Global Corp* を作成します。

注意： 実稼働環境ではサンプルドメインを使用しないことをお勧めします。

- 「設定」をクリックします。設定中に、Managed Review & Approval Solution Accelerator によってユーザーロールが作成され、サンプルユーザーに割り当てられます。ユーザーロールと、サンプルユーザーへのユーザーロールのマッピングについて詳しくは、F1 キーを押してください。

注意： ユーザーロールは、サンプルユーザーを作成するかどうかにかかわらず作成されます。

- 設定が完了したら、「次へ」をクリックします。

3.1.2 Solution Accelerator の依存関係

Solution Accelerator を正常に設定し、スムーズに実行するには、LiveCycle Configuration Manager を実行中に次のことを確認する必要があります。

- モジュールの選択画面で、インストールされている Solution Accelerator 用に次のモジュールが選択されていることを確認します。
 - **Managed Review & Approval:** Adobe® LiveCycle™ Content Services ES2、Adobe® LiveCycle™ Process Management ES2 および Adobe® LiveCycle™ Reader Extensions ES2
 - **Correspondence Management :** Content Services ES2、Adobe® LiveCycle™ Forms ES2 および Adobe® LiveCycle™ Output ES2
 - **Interactive Statements:** Content Services ES2、Adobe® LiveCycle™ Digital Signatures ES2、Forms ES2 および Reader Extensions ES2
- タスク選択画面で、次のタスクが選択されていることを確認します。
 - LiveCycle ES2 EAR を設定
 - LiveCycle ES2 EAR をデプロイ
 - LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイ
- 既に設定されているパラメータが表示されますが、この実行中は編集できません。これらのフィールドを編集可能にして値を変更する必要がある場合は、「設定を編集」をクリックします。

例えば、LiveCycle ES2 を設定画面では、一時ファイルのディレクトリ、グローバルドキュメントストレージ (GDS) またはフォントを変更できます。

3.2 Solution Accelerator のデプロイメントの検証

LiveCycle Configuration Manager を正常に実行後、Solution Accelerator のデプロイメントを検証できます。

- **Correspondence Management**
http://[server_name]:[port]/cmsa にログオンします。
 - **Interactive Statements**
http://[server_name]:[port]/adminui にログオンします。サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理に移動して、サービスのリストに「AssetPlacement」サービスと「BatchProcessor」サービスが表示されていることを確認します。
 - **Managed Review & Approval**
http://[server_name]:[port]/reviewportal にログオンします。
- 注意：** 次のデフォルトの管理者秘密鍵証明書を使用できます。
- ユーザー名：administrator
 - パスワード：password

3.3 次の手順

Solution Accelerator のインストール、設定、デプロイを完了したら、Solution Accelerator をフルに機能させるための追加設定を行う必要があります。[「デプロイメント完了後の作業」\(16 ページ\)](#) を参照してください。

4

デプロイメント完了後の作業

Solution Accelerator は、LiveCycle サーバーにデプロイされると稼働します。ただし、すべての機能を使用し、Solution Accelerator を使用してワークフローを実装するには、追加の設定が必要です。このドキュメントでは、Solution Accelerator の使用を開始する際に必要な追加の設定について説明します。

4.1 Correspondence Management

LiveCycle Configuration Manager を使用して Correspondence Management Solution Accelerator を設定した場合、適切かつインタラクティブな顧客コミュニケーションソリューションを実装するうえで必要なユーザーロールが作成されます。ユーザーロールについて詳しくは、[「ユーザーロール」\(16 ページ\)](#) を参照してください。また、これらのユーザーロールに関連付けられている権限について詳しくは、[「権限」\(17 ページ\)](#) を参照してください。

管理者は、LiveCycle 管理コンソールを使用して、ユーザーロールの作成、権限の追加および別のユーザーへのユーザーロールの割り当てを行います。これらのタスクの実行方法について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#) を参照してください。

設定時に「サンプルユーザーを作成」を選択した場合は、サンプルユーザーが作成され、そのサンプルユーザーにユーザーロールが割り当てられます。サンプルユーザーについて詳しくは、[「サンプルユーザー」\(17 ページ\)](#) を参照してください。

4.1.1 ユーザーロール

次の表で、さまざまなユーザーロールとそれらの一般的な役割について説明します。

ユーザーロール	役割
フォームデザイナー	<ul style="list-style-type: none">● LiveCycle Designer を使用して、Correspondence Management で使用するフォームレイアウトを設計します。● XDP テンプレートをデザインします。
管理者	<ul style="list-style-type: none">● 一般的なシステム管理者です。● ユーザーがシステムのデータディクショナリを変更または削除できるようにします。● カテゴリを定義します。
専門家 (SME)	<ul style="list-style-type: none">● テキスト、レイアウト、画像、条件およびリストの作成、取得、更新および削除を行います。
アプリケーションスペシャリスト	<ul style="list-style-type: none">● テキスト、画像、条件およびリストオブジェクトを使用してレターテンプレートを定義します。● レターテンプレートの作成、取得、更新および削除を行います。
クレーム調整者	<ul style="list-style-type: none">● レターテンプレートを使用して、顧客に配信するレターコミュニケーションを作成します。
開発者	<ul style="list-style-type: none">● XSD スキーマとデータモデリングの概念を理解し、顧客対応で使用されるデータディクショナリを作成または管理します。

4.1.2 サンプルユーザー

次の表で、Correspondence Management の設定時に「サンプルユーザーを作成」を選択した場合に作成されるサンプルユーザーについて説明します。

ユーザー	ユーザー名	ユーザーロール
Todd Goldman	tgoldman	管理者
Jocelyn Robinson	jrobinson	フォームデザイナー
Heather Douglas	hdouglas	SME
Caleb Lopez	clopez	アプリケーションスペシャリスト
Frank Kricfalusi	fkricfalusi	開発者
Gloria Rios	grios	クレーム調整者

注意： すべてのサンプルユーザーのデフォルトのパスワードは password です。

4.1.3 権限

LiveCycle Configuration Manager を使用して Correspondence Management を設定するとき、各ユーザーロールには、特定の操作の実行権限が関連付けられます。次の表で、これらの権限と、対応するユーザーロールについて説明します。

権限	用途	ユーザーロール
CM Category Create	カテゴリの作成	管理者
CM Category Delete	カテゴリの削除	管理者
CM Category Edit	カテゴリの編集	管理者
CM Category View	カテゴリの表示	アプリケーションスペシャリスト、SME、管理者
CM Condition Activate	条件のアクティベート	SME、管理者
CM Condition Copy	条件のコピー	SME、管理者
CM Condition Create	条件の作成	SME、管理者
CM Condition Delete	条件の削除	SME、管理者
CM Condition Edit	条件の編集	SME、管理者
CM Condition View	条件の表示	アプリケーションスペシャリスト、SME、管理者
CM DataDictionary Create	データディクショナリの作成	開発者、管理者
CM DataDictionary Delete	データディクショナリの削除	開発者、管理者
CM DataDictionary Edit	データディクショナリの編集	開発者、管理者
CM DataDictionary View	データディクショナリの表示	開発者、アプリケーションスペシャリスト、SME、管理者
CM Picture Activate	画像のアクティベート	SME、管理者
CM Picture Copy	画像のコピー	SME、管理者

権限	用途	ユーザーロール
CM Picture Create	画像の作成	SME、管理者
CM Picture Delete	画像の削除	SME、管理者
CM Picture Edit	画像の編集	SME、管理者
CM Picture View	画像の表示	アプリケーションスペシャリスト、SME、管理者
CM Layout Activate	レイアウトのアクティベート	フォームデザイナー、管理者
CM Layout Copy	レイアウトのコピー	フォームデザイナー、管理者
CM Layout Create	レイアウトの作成	フォームデザイナー、管理者
CM Layout Delete	レイアウトの削除	フォームデザイナー、管理者
CM Layout Edit	レイアウトの編集	フォームデザイナー、管理者
CM Layout View	レイアウトの表示	フォームデザイナー、アプリケーションスペシャリスト、SME、管理者
CM Letter Activate	レターのアクティベート	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM Letter Copy	レターのコピー	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM Letter Create	レターの作成	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM Letter Delete	レターの削除	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM Letter Edit	レターの編集	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM Letter PreviewWithTestData	テストデータを使用したレターのプレビュー	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM Letter PreviewWithoutData	データを使用しないレターのプレビュー	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM Letter View	レターの表示	アプリケーションスペシャリスト、管理者
CM List Activate	リストのアクティベート	SME、管理者
CM List Copy	リストのコピー	SME、管理者
CM List Create	リストの作成	SME、管理者
CM List Delete	リストの削除	SME、管理者
CM List Edit	リストの編集	SME、管理者
CM List View	リストの表示	アプリケーションスペシャリスト、SME、管理者
CM System DataDictionary Create	システムのデータディクショナリの作成	管理者

権限	用途	ユーザーロール
CM System DataDictionary Delete	システムのデータディクショナリの削除	管理者
CM System DataDictionary Edit	システムのデータディクショナリの編集	管理者
CM System DataDictionary View	システムのデータディクショナリの表示	管理者
CM Text Activate	テキストのアクティベート	SME、管理者
CM Text Copy	テキストのコピー	SME、管理者
CM Text Create	テキストの作成	SME、管理者
CM Text Delete	テキストの削除	SME、管理者
CM Text Edit	テキストの編集	SME、管理者
CM Text View	テキストの表示	アプリケーションスペシャリスト、SME、管理者

注意： フォームデザイナー、開発者、クレーム調整者、アプリケーションスペシャリスト、SMEおよび管理者のユーザーロールには、ContentSpace ES2 ユーザーの権限も割り当てる必要があります。管理者のユーザーロールには、ContentSpace 管理者ロールも割り当てる必要があります。ユーザーロールに対する権限の割り当て方法について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

4.2 Interactive Statements

Solution Accelerator に備えられているカスタマイズ可能なソリューションテンプレートは、ソリューションの例として使用できるほか、これをベースとしてカスタマイズされたソリューションを短時間で構築することもできます。Interactive Statements にバンドルされている Finance Corp ソリューションテンプレートを実行するには、[「サンプルの Finance Corp ソリューションテンプレートを使用する準備」](#) (19 ページ) で説明している手順を実行する必要があります。

警告： Finance Corp ソリューションテンプレートには、「FinanceCorp sample web portal」という Web ポータルが含まれています。この Web ポータルは、組織内の Web サイト開発のセキュリティ規格に準拠しない場合があるため、実稼働環境では使用しないことをお勧めします。デモンストレーション目的でのみ使用してください。実稼働環境で使用する必要がある場合は、必要に応じてセキュリティを確保してください。

さらに、Interactive Statements SDK に付随している Adobe® Flash® Builder™ プラグインをインストールする必要があります。[「Flash Builder プラグインのインストール」](#) (20 ページ) を参照してください。

4.2.1 サンプルの Finance Corp ソリューションテンプレートを使用する準備

1. デフォルトの管理者資格情報を使用して ContentSpace ES2 コンソールにログオンします。
http://[server_name]:[port_number]/contentspace
2. 「会社のホーム」をクリックします。
3. 「その他のアクション」を展開して「読み込み」をクリックします。
4. [LiveCycleES2_root]/sa_resources/SA_SDK_9.5/InteractiveStatements/RetailBanking に移動して、**adobe-sa-is-financecorp-cs-assets.zip** を選択し、「OK」をクリックします。

5. 会社のホーム Web ページを更新して、新しいスペース「assets」を表示します。

ヒント： Finance Corp サンプルアプリケーションには、インタラクティブステートメントを電子メールで送信するために電子メールサーバーを設定するオプションがあります。電子メールサービスの設定については、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

注意： LiveCycle ES2 を実行しているアプリケーションサーバーでデフォルト以外のポートが使用されている場合は、adobe-as-is-financecorp.ear ファイルを手動で設定する必要があります。[「Finance Corp ソリューションテンプレート用の EAR の設定」\(20 ページ\)](#)を参照してください。

4.2.2 Finance Corp ソリューションテンプレート用の EAR の設定

警告： これを設定する必要があるのは、次のデフォルト以外のポートをアプリケーションサーバーで使用している場合のみです。

- **JBoss** : 8080
- **WebSphere** : 9080
- **WebLogic** : 8001

1. [LiveCycleES2 root]¥deploy に移動し、WinZip ファイルアーカイブツールを使用して adobe-sa-is-financecorp-[app_server].ear ファイルを開きます。

注意： システムに WinZip がインストールされていない場合は、ファイルの拡張子を .zip に変更したうえで、システムにインストールされている任意のファイルアーカイブツールを使用してファイルを開きます。

2. ファイルアーカイブツールを使用してこのファイルを開き、adobe-sa-is-financecorp-portal.war ファイルに移動します。

3. WEB-INF¥classes¥com¥adobe¥example¥financecorp¥controller¥serverinfo.properties ファイルに移動します。

4. 任意のテキストエディタで serverinfo.properties ファイルを開き、次の行の *port* の値を変更します。
`ejb.endpoint=[...]://localhost:port`

5. serverinfo.properties ファイルを保存します。これにより、.ear および .war アーカイブファイルが両方とも更新されます。

6. LiveCycle Configuration Manager を実行して Interactive Statements Solution Accelerator のコンポーネントをデプロイします。[「Solution Accelerator の設定およびデプロイ」\(11 ページ\)](#)を参照してください。

4.2.3 Flash Builder プラグインのインストール

1. Flash Builder 4 をシステムにインストールします。詳しくは、Flash Builder [製品ページ](#)を参照してください。

2. Flash Builder アプリケーションを開きます。

注意： Windows 7 システムでは、管理者としてログインしていることを確認してください。

3. ヘルプ／新規ソフトウェアをインストール をクリックします。

4. 「追加」をクリックします。

5. 「アーカイブ」をクリックし、[LiveCycleES2_root]/sa_resources/SA_SDK_9.5/BuildingBlocks/PersonalizationManager/plugin/adobe-assetplacement-plugin-update.zip を参照して選択し、「開く」をクリックします。

6. 使用可能なソフトウェアダイアログボックスで、「Adobe Systems Incorporated: Interactive Document Project plug-in」を選択して、「次へ」をクリックします。
7. インストールの詳細を確認して「次へ」をクリックします。
8. ライセンスの詳細を確認して「承諾」をクリックします。
9. 「完了」をクリックします。プラグインがインストールされます。

4.2.4 Flex 3 SDK のインストール

Acrobat 9 でインタラクティブステートメントを使用するには、Flex 3 SDK バージョン 3.0.1 をインストールする必要があります。Flex 3.0.1 のコピーは、[LiveCycleES2_root]/sa_resources/Flex-sdk-3.0.1/ ディレクトリにあります。

1. Flex-sdk-3.0.1 ディレクトリをローカルマシンにコピーします。例えば、Windows マシンの場合は C:\Program Files\Adobe\Adobe Flash Builder 4\sdk\ にコピーします。
2. Flash Builder 4 アプリケーションを開き、ウィンドウメニューを展開します。
3. 「環境設定」をクリックします。
4. 右側のパネルで、「Flash Builder」を展開し、インストールされている Flex SDK を選択します。
5. 新しい Flex SDK を追加し、ローカルマシン上の Flex 3 SDK ディレクトリを指定します。例えば、C:\Program Files\Adobe\Adobe Flash Builder 4\sdk\Flex-sdk-3.0.1 を指定します。

4.2.5 BatchProcessor サービスでの XA データソースの使用の設定

LiveCycle Workbench アプリケーションを使用すると、BatchProcessor サービスで AdobeDefaultSA_DS データソースを使用するように設定できます。Workbench アプリケーションで次の操作を行います。

1. 「Components」表示をクリックします。
2. BatchProcessor / Active Services を展開します。
3. 「BatchProcessor:1.0」を右クリックし、「Edit Service Configuration」を選択します。
4. 「Data Source Name」フィールドから「AdobeDefaultSA_DS」を選択します。

警告： SQL Server データベースを使用する一部のシナリオで XA データソースを使用するには、SQL Server データベースに追加の設定が必要になることがあります。詳しくは、[「SQL Server での XA データソースの使用の設定」\(22 ページ\)](#) を参照してください。

アプリケーションサーバー用に XA データソースを手動で設定する方法については、[「付録 - データソースの手動設定」\(26 ページ\)](#) を参照してください。

4.2.6 SQL Server での XA データソースの使用の設定

次のシナリオでは、[Microsoft のドキュメント](#)の説明に従って SQL Server データベースを設定する必要があります。

- (WebSphere のみ) AdobeDefaultSA_DS データソースが SQL Server データベースに接続する場合

注意： WebLogic および JBoss の場合、BatchProcessor サービスでは LiveCycle インストーラによって作成された IDP_DS データソースを使用できます。この場合、SQL Server データベースの追加の設定は不要です。

- BatchProcessor サービスの runJDBCCursorJob 操作と runJDBCPagingJob 操作を使用する場合
- 分散トランザクション用の Microsoft SQL Server XA 対応 JDBC ドライバと共に SQL Server データベースを使用する場合

4.3 Managed Review & Approval

Managed Review & Approval Solution Accelerator を使用して高度なワークフローを実装するには、LiveCycle 管理コンソールを使用して次のサービスを設定する必要があります。

- External User Registration
- Review, Commenting, and Approval
- Review, Commenting, and Approval Utility
- Review Zone Provider
- Server-side Signature

これらのサービスの設定方法について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「サービスの管理」を参照してください。

さらに、Managed Review & Approval Solution Accelerator には、レビューおよび承認プロセスの様々なステージで参加者を確認するための電子メール通知が必要です。これを有効にするには、LiveCycle 管理コンソールを使用して電子メールサービスを設定します。詳しくは、「[電子メールサービスの設定](#)」(22 ページ)を参照してください。

4.3.1 電子メールサービスの設定

LiveCycle 電子メールサービスによって、プロセスでは電子メールメッセージを POP3 サーバーや IMAP サーバーから受信したり、SMTP サーバーに送信したりすることができます。このサービスは、LiveCycle 管理コンソールから設定できます。

1. LiveCycle 管理コンソールにログオンします。
`http://[server_name]:[port_number]/adminui`
2. サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理に移動します。
3. 「名前」フィールドに **emailservice** と入力して、「フィルタ」をクリックします。
4. 「EmailService: 1.0」をクリックします。電子メールサービス設定ページの「設定」タブが開きます。
5. 次の詳細を指定します。
 - SMTP サーバーのホスト名
 - サーバーの SMTP ポート番号 (デフォルト: 25)
 - SMTP 認証を有効にしてサーバーへのアクセスを認証

- SMTP サーバーにアクセスするユーザー名 (SMTP 認証が有効な場合に必要)
- SMTP サーバーにアクセスするパスワード (SMTP 認証が有効な場合に必要)

6. 「保存」をクリックします。

LiveCycle Process Management を使用してタスク通知を有効にするには、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「電子メールの設定」を参照してください。

4.3.2 複数のスキーマの設定 (DB2 のみ)

複数の LiveCycle インスタンスが 1 つの DB2 データベースインスタンス上の異なるスキーマを使用する場合は、レビュー、コメントおよび承認の構築ブロックのデータソースは、最初の LiveCycle ノードにのみデプロイされる可能性があります。この問題を回避するには、次の JVM 引数をアプリケーションサーバーに追加する必要があります。

```
-DAdobeDefaultSA_DS.default_schema=<schema_name>
```

注意： <schema_name> は、大文字のスキーマ名に置き換えます。

4.4 Solution Accelerator のアンインストール

アンインストーラでは、Solution Accelerator インストーラで作成されたファイルとアプリケーションが削除されます。アンインストール中に一部のディレクトリが削除されない場合は、システムを再起動して、削除されていないディレクトリを手動で削除してください。

警告： Solution Accelerator アンインストーラを実行すると、システムにインストールされている Solution Accelerator がすべて削除されます。

1. アンインストールプログラムを起動します。

- **(Windows)** [LiveCycleES2 root]¥Uninstall_Solution Accelerators ディレクトリに移動して、Uninstall Solution Accelerators Installation.exe ファイルをダブルクリックします。
- **(AIX、Linux および Solaris)** [LiveCycleES2 root]/Uninstall_Solution Accelerators ディレクトリに移動して、./Uninstall Solution Accelerators Installation コマンドを実行します (場合によっては、chmod 777 などのコマンドを入力することによって、このバイナリを実行可能ファイルにする必要があります)。

ヒント： ディレクトリ名にスペースが含まれているため、製品をアンインストールするには、ディレクトリの完全パスをコマンドの一部として含める必要があります。

2. アンインストールプログラムの画面の指示に従って作業を進め、「完了」をクリックします。

ここでは、LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストールとデプロイ、または操作の際に発生する可能性のある問題について説明し、それらの問題を回避する方法を紹介します。

5.1 Interactive Statements

5.1.1 runJDBCCursorJob サービスでエラーが発生する

バッチ処理用の入力データをデータベーステーブルから取得すると、runJDBCCursorJob サービスでエラーが発生します。このエラーは、次の行の処理を試みたときに ResultSet が閉じられていることを示す SQL 例外です。

この問題を回避するため、runJDBCCursorJob ではなく runJDBCPagingJob 操作を使用することをお勧めします。

5.1.2 実行時間が 20 分を超えたスレッドが WebLogic によって停止される

バッチ処理の実行時間が 20 分を超えたスレッドは、スタック状態にあると見なされ、WebLogic アプリケーションサーバーによって停止されます。サーバーによってスタック状態にあると見なされるまでスレッドが動作を継続する最大時間は、StuckThreadMaxTime パラメータで定義します。LiveCycle で設定される StuckThreadMaxTime パラメータのデフォルト値は 1,200 秒です。

この問題を回避するには、次の手順に従って StuckThreadMaxTime パラメータの値を大きくしてください。

1. WebLogic 管理コンソールにログオンします。
2. 「Domain Structure」ウィンドウで、LiveCycle / Environment を展開します。
3. 「server1」をクリックします。
4. 「Configuration」タブで、「Tuning」をクリックします。
5. 必要に応じて、「Stuck Thread Max Time」を変更します。

詳しくは、[WebLogic のドキュメント](#)を参照してください。

5.2 Correspondence Management

5.2.1 サーバーログに不必要なメッセージが書き込まれる（WebSphere のみ）

LiveCycle ES2.5 インストールが WebSphere アプリケーションサーバー上にある場合、Correspondence Management コンソールにアクセスしたときにサーバーログが情報メッセージでいっぱいになることがあります。こうしたメッセージが定期的書き込まれるため、サーバーログが読めなくなる可能性があります。このメッセージの問題を回避するには、次の手順を実行します。

1. WebSphere Administrative Console にログオンし、Troubleshooting / Logs and Trace に移動します。
2. サーバー列で、ログレベルを設定するコンポーネントがデプロイされているアプリケーションサーバーの名前をクリックします。
3. 「Change Log Level Details」をクリックします。
4. 「Runtime」タブを選択し、「Save runtime changes to configuration as well」を選択します。
5. 「org.springframework.flex.servlet.MessageBrokerHandlerAdapter」のログレベルを「WARN」に変更します。
6. 「OK」をクリックし、次に「Save directly to the master configuration」をクリックします。

A.1 JBoss での Solution Accelerator 用 XA データソースの作成

JBoss から Solution Accelerator データを格納しているデータベースへの接続を有効にするには、次のタスクを実行する必要があります。

- adobe-sa-ds.xml というデータソースファイルを作成します。[「adobe-sa-ds.xml ファイルの作成」\(26 ページ\)](#)を参照してください。
- <http://community.jboss.org/wiki/EncryptingDataSourcePasswords> で説明されているいずれかの方法を使用して、データソースファイル (adobe-sa-ds.xml および database-ds.xml) と login-config.xml ファイルのパスワードを暗号化します。
http://blogs.adobe.com/livecycle/2009/10/livecycle_-_encrypting_clearite.html の手順を使用することもできます。

注意： Oracle および MS SQL Server データベースの場合は、`[appserver root]/server/all/conf` ディレクトリで login-config.xml ファイルを探します。このファイルで、`<module-option name="managedConnectionFactoryName">` タグを探し、`service` プロパティの値が `XATxCM` であることを確認します。

A.1.1 adobe-sa-ds.xml ファイルの作成

1. `<JBoss Home>/server/lc_turnkey/deploy` ディレクトリに adobe-sa-ds.xml という xml ファイルを作成します。
2. 使用するデータベースに応じて、次の行を adobe-sa-ds.xml ファイルにコピーします。

注意： 太字になっているテキストをデータベース固有の値に置き換えてください。

Oracle

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<datasources>
<xa-datasource>
<jndi-name>AdobeDefaultSA_DS</jndi-name>
<xa-datasource-class>oracle.jdbc.xa.client.OracleXADataSource</xa-datasource
-class>
<xa-datasource-property name="URL">
jdbc:oracle:thin:@databaseHostName:port/sid</xa-datasource-property>
<use-java-context>>false</use-java-context>
<user-name>username</user-name>
<password>password</password>
<min-pool-size>10</min-pool-size>
<max-pool-size>30</max-pool-size>
<exception-sorter-class-name>org.jboss.resource.adapter.jdbc.vendor.
OracleExceptionSorter</exception-sorter-class-name>
<blocking-timeout-millis>20000</blocking-timeout-millis>
<idle-timeout-minutes>2</idle-timeout-minutes>
<prepared-statement-cache-size>20</prepared-statement-cache-size>
<transaction-isolation>TRANSACTION_READ_COMMITTED</transaction-isolation>
<isSameRM-override-value>>false</isSameRM-override-value>
```

```
<track-connection-by-tx>true</track-connection-by-tx>
<no-tx-separate-pools>true</no-tx-separate-pools>
<metadata>
<type-mapping>Oracle9i</type-mapping>
</metadata>
</xa-datasource>
</datasources>
```

MySQL

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<datasources>
<local-tx-datasource>
<jndi-name>AdobeDefaultSA_DS</jndi-name>
<connection-url>jdbc:mysql://databaseHostName:port/dbName</connection-url>
<driver-class>com.mysql.jdbc.Driver</driver-class>
<user-name>username</user-name>
<password>password</password>
<min-pool-size>1</min-pool-size>
<max-pool-size>30</max-pool-size>
<valid-connection-checker-class-name>com.mysql.jdbc.integration.jboss.MySQLValidConnectionChecker</valid-connection-checker-class-name>
<exception-sorter-class-name>com.mysql.jdbc.integration.jboss.ExtendedMySQLExceptionHandler</exception-sorter-class-name>
<new-connection-sql>SELECT count (*) from DUAL</new-connection-sql>
<check-valid-connection-sql>SELECT count (*) from
DUAL</check-valid-connection-sql>
<blocking-timeout-millis>20000</blocking-timeout-millis>
<idle-timeout-minutes>2</idle-timeout-minutes>
<prepared-statement-cache-size>20</prepared-statement-cache-size>
<transaction-isolation>TRANSACTION_READ_COMMITTED</transaction-isolation>
</local-tx-datasource>
</datasources>
```

MS SQL Server

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<datasources>
<xa-datasource>
<jndi-name>AdobeDefaultSA_DS</jndi-name>
<xa-datasource-class>com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerXADataSource</xa-datasource-class>
<xa-datasource-property
name="URL">jdbc:sqlserver://databaseHostName:port;DatabaseName=dbname</xa-datasource-property>
<use-java-context>>false</use-java-context>
<user-name>username</user-name>
<password>password</password>
<min-pool-size>1</min-pool-size>
<max-pool-size>30</max-pool-size>
<blocking-timeout-millis>20000</blocking-timeout-millis>
<idle-timeout-minutes>2</idle-timeout-minutes>
<prepared-statement-cache-size>20</prepared-statement-cache-size>
<transaction-isolation>TRANSACTION_READ_COMMITTED</transaction-isolation>
<isSameRM-override-value>>false</isSameRM-override-value>
<track-connection-by-tx>true</track-connection-by-tx>
```

```
<no-tx-separate-pools>true</no-tx-separate-pools>  
<metadata>  
<type-mapping>MS SQLSERVER2000</type-mapping>  
</metadata>  
</xa-datasource>  
</datasources>
```

3. ファイルを保存します。

A.2 WebLogic での Solution Accelerator 用 XA データソースの作成

A.2.1 Oracle データベース接続の設定

WebLogic Server および LiveCycle ES2 デプロイメントで Oracle 11g/10g データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

A.2.1.1 Oracle 用の新しいデータソースの作成

1. Web ブラウザの URL 行に `http://[host name]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
2. WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
3. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
4. 「Domain Structure」で、Services / JDBC / Data Sources をクリックし、右側のウィンドウで「New」をクリックします。
5. 次の画面で、以下のプロパティを設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「Database Type」リストで「Oracle」を選択し、「Next」をクリックします。
 - **(WebLogic 10g のみ)** 「Database Driver」リストで「Oracle's Driver (Thin XA) Versions: 9.0.1,9.2.0,10,11」を選択します。
 - **(WebLogic 11g のみ)** 「Database Driver」リストで「Oracle's Driver (Thin XA) for Service connections; Versions: 9.0.1,9.2.0,10,11」を選択します。
6. 「Transaction Options」画面で「Next」をクリックします。
7. LiveCycle ES2 のインストールの準備で作成した Oracle データベースに適用される以下のプロパティを定義し、「Next」をクリックします。
 - **Database Name** : 作成したデータベースの名前。Oracle RAC の場合、データベースに固有のサービス名を指定します。
 - **Host Name** : Oracle を実行しているコンピュータの名前または IP アドレス。
 - **Port** : データベースポート。デフォルトのポートは 1521 です。
 - **Database User Name** : Oracle データベースに作成したユーザーの名前。
 - **Password** および **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられているパスワード。

8. **(Oracle RAC のみ)** 「URL」 フィールドの内容を、次の接続 URL に置き換えます。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ENABLE=broken) (ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost1) (PORT=1521)) (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost2) (PORT=1521)) (LOAD_BALANCE=on) (FAILOVER=on)) (CONNECT_DATA=(SERVER=dedicated) (SERVICE_NAME=service.yourcompany.com) (FAILOVER_MODE=(TYPE=session) (METHOD=basic) (RETRIES=10) (DELAY=3))))
```

上記の接続 URL で太字で示されているテキストは、次の値に置き換えます。

- **yourhost1** : データベースをホストするクラスタ内のプライマリノードの名前、IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名。
- **yourhost2** : データベースをホストするクラスタ内のセカンダリノードの名前、IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名。

注意 : データベースをホストするクラスタは任意の数のノードで構成することができます。yourhost1 および yourhost2 は、クラスタが 2 つのノードで構成される場合の例です。

- **service.yourcompany.com** : Oracle RAC データベースのサービス名。

9. 「Test Configuration」 をクリックして設定を確認します。

注意 : テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「Next」 をクリックします。テストが正常に終了しなかった場合は、エラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。

10. 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択し、「Finish」 をクリックします。
11. ホームページから、Summary of JDBC Data Sources / AdobeDefaultSA_DS に移動します。
12. 「Transaction」 タブで、「Set XA Transaction Timeout」 を選択し、「XA Transaction Timeout」 の値が **0** であることを確認します。

A.2.1.2 接続プールの設定

1. 「Domain Structure」 で、Services / JDBC / Data Sources をクリックします。
2. 右側のウィンドウで「AdobeDefaultSA_DS」 をクリックします。
3. 次の画面で、Configuration / Connection Pool をクリックします。
4. 「Maximum Capacity」 ボックスに **30** と入力します。
5. 「Statement Cache Size」 ボックスに **80** と入力します。
6. 「Save」 をクリックし、「Activate Changes」 をクリックします。
7. WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

A.2.2 MySQL データベース接続の設定

警告： Managed Review & Approval Solution Accelerator では、WebLogic サーバー上の MySQL データベースの AdobeDefaultSA_DS データソースは使用しません。代わりに、IDP_DS データソースを使用する必要があります。『[LiveCycle ES2 のインストールおよびデプロイ \(WebLogic 版\)](#)』の「MySQL データベース接続の設定」を参照してください。さらに、次の手順で WebLogic の JVM 引数を `RCA_UseIDP_DS=true` と設定する必要があります。

1. WebLogic 管理コンソールにログオンします。
2. 「Domain Structure」で、Environment / Servers をクリックし、サーバーの名前をクリックします。
3. 「Configuration」タブをクリックし、「Server Start」をクリックします。
4. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
5. 「Arguments」ボックスに、次のテキストを入力します。
`-DRCA_UseIDP_DS=true`
6. 「Save」をクリックします。

他の Solution Accelerator の場合、WebLogic Server および LiveCycle ES2 デプロイメントから手動でインストールされた MySQL データベースに接続できるようにするには、接続プールと AdobeDefaultSA_DS データソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

A.2.3 DB2 データベース接続の設定

WebLogic Server および LiveCycle ES2 デプロイメントで DB2 データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

A.2.3.1 DB2 データベースドライバのインストール

次の場所のいずれかから、`db2jcc.jar` ファイルおよび `db2jcc_license_cu.jar` ファイルを `[appserverdomain]/idplib` ディレクトリにコピーします。

- `[dbserver root]` ディレクトリの `java` ディレクトリ。例えば、`[dbserver root]¥ibm¥SqlLib¥java` (Windows) または `[dbserver root]/java` (UNIX)。
- `[LiveCycleES2 root]¥lib¥db¥db2`

A.2.3.2 WebLogic 10g 上の DB2 の新しいデータソースの作成

1. Web ブラウザの URL 行に `http://[host name]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
2. WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
3. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
4. 「Domain Structure」で、Services / JDBC / Data Sources をクリックします。
5. 右側のウィンドウで「New」をクリックします。
6. 次の画面で、以下のプロパティを設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Name」ボックスに、`AdobeDefaultSA_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに、`AdobeDefaultSA_DS` と入力します。

- 「Database Type」 リストで「DB2」を選択し、「Next」をクリックします。
 - (WebLogic 10g のみ) 「Database Driver」 リストで「Other」を選択します。
 - (WebLogic 11g のみ) 「Database Driver」 リストで「IBM DB2 Driver (Type 4 XA) for JDBC and SQLJ」を選択します。
7. (WebLogic 10g のみ) 「Supports Global Transactions」を選択します。
8. 「Next」をクリックし、次の画面で、LiveCycle ES2 のインストールの準備で作成したデータベースに適用される以下のプロパティを定義します。
- **Database Name** : 作成したデータベースの名前。
 - **Host Name** : DB2 を実行しているコンピュータの名前または IP アドレス。
 - **Port** : データベースポート。デフォルトのポートは 50000 です。
 - **Database User Name** : DB2 データベースに作成したユーザーの名前。
 - **Password** および **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられているパスワード。
9. 「Next」をクリックし、以下のプロパティを設定します。
- (WebLogic 10g のみ) 「Driver Class Name」ボックスに、**com.ibm.db2.jcc.DB2XADataSource** と入力します。
 - (WebLogic 10g のみ) 「URL」ボックスに、**jdbc:db2://[host name]:[port]/[database_name]** と入力します。
 - 「Properties」ボックスで、次のプロパティを定義します。
 - **user=<user ID>** (「Database User Name」で指定したユーザー ID)
 - **driverType=<value>**
 - **portNumber=<value>**
 - **databaseName=<value>**
 - **serverName=<value>**
- 例えば、次のように指定します。
- **user=db2admin**
 - **driverType=4**
 - **portNumber=50000**
 - **databaseName=MRA**
 - **serverName=10.40.129.160**
10. 「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。
- 注意** : テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「Next」をクリックします。テストが正常に終了しなかった場合は、エラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
11. 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
12. 「Finish」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

A.2.3.3 DB2 に対する接続プールの設定

1. 「Domain Structure」で、Services / JDBC / Data Sources をクリックします。
2. 右側のウィンドウで「AdobeDefaultSA_DS」をクリックします。
3. 次の画面で、Configuration / Connection Pool をクリックします。
4. 「Maximum Capacity」ボックスに **30** と入力します。
5. 「Statement Cache Size」ボックスに **80** と入力します。
6. 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。
7. WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

A.2.4 SQL Server データベース接続の設定

WebLogic Server および LiveCycle ES2 デプロイメントで SQL Server データベースに接続できるようにするには、接続プールとデータソースを設定して WebLogic Server のデータベース接続を作成する必要があります。

A.2.4.1 SQL Server データベースドライバのインストール

- ドライバのインストールをまだ実行していない場合は、Microsoft のダウンロードセンターから SQL Server 2005 JDBC Driver 1.2 をダウンロードしてください。
- この Web サイトの指示に従って、ドライバをダウンロードし、インストールします。システム上でドライバをインストールしたディレクトリの場所を控えておいてください。

注意： Microsoft SQL Server 2005 SP2 と Microsoft SQL Server 2008 のどちらについても、SQL Server JDBC Driver 1.2 を使用します。

A.2.4.2 クラスパスへの sqljdbc.jar ファイルの追加

1. Web ブラウザの URL 行に `http://[host name]:[port]/console` と入力して、WebLogic 管理コンソールを起動します。
2. WebLogic Server ドメインに対して作成したユーザー名とパスワードを入力し、「Log In」をクリックします。
3. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
4. 「Domain Structure」で、Environment / Servers をクリックします。
5. 右側のウィンドウで、管理対象サーバーの名前をクリックします。
6. 次の画面で、「Configuration」 / 「Server Start」をクリックします。
7. 「Class Path」ボックスに、次の例のように、sqljdbc.jar ファイルの場所とファイル名を入力します。
`DOMAIN_HOME\idplib\sqljdbc.jar`
ここで、**DOMAIN_HOME** はベースドメインの場所です (C:\bea\user_projects\domains\base_domain など)。
8. 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

A.2.4.3 SQL Server 用の新しいデータソースの作成

1. Change Center で、「Lock & Edit」をクリックします。
2. 「Domain Structure」で、Services / JDBC / Data Sources をクリックします。
3. 右側のウィンドウで「New」をクリックします。
4. 次の画面で、以下のプロパティを設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Name」ボックスに、**AdobeDefaultSA_DS** と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに、**AdobeDefaultSA_DS** と入力します。
 - 「Database Type」リストで「MS SQL Server」を選択します。
 - (**Weblogic 10g のみ**) 「Database Driver」リストで、「Microsoft's MS SQL Server Driver (Type 4 XA Versions:2005)」を選択します。
5. (**Weblogic 11g のみ**) 「JDBC Data Source Properties」画面で、「Database Driver」リストから「Microsoft's MS SQL Server Driver (Type 4 XA Versions:2005, 2008)」を選択し、「Next」をクリックします。
6. 「Transaction Options」画面で「Next」をクリックします。
7. (**統合された認証の場合のみ**) アプリケーションサーバーを実行しているコンピュータの Windows システムパスに `sqljdbc_auth.dll` ファイルを追加します。`sqljdbc_auth.dll` ファイルは、Microsoft SQL JDBC 1.2 ドライバのインストール先ディレクトリ（デフォルトでは `<InstallDir>/sqljdbc_1.2/enu/auth/x86`）にあります。
8. LiveCycle ES2 のインストールの準備で作成した SQL Server データベースに適用される以下のプロパティを定義します。
 - **Database Name** : 作成したデータベースの名前。
 - **Host Name** : SQL Server を実行しているコンピュータの名前または IP アドレス。
 - **Port** : データベースポート。デフォルトのポートは 1433 です。
 - **Database User Name** : SQL Server データベースに作成したユーザーの名前。
 - **Password** および **Confirm Password** : ユーザーに関連付けられているパスワード。
9. 「Next」をクリックし、「Test Configuration」をクリックして設定を確認します。

注意 : テストが正常に終了すると、接続テストが成功したというメッセージが表示されます。「Next」をクリックします。テストが正常に終了しなかった場合は、エラーメッセージを確認し、テストが正常に終了するまで設定を変更します。
10. 次の画面で、データソースの接続先のサーバー（ここでは管理対象サーバー）を選択します。
11. 「Finish」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。

A.2.4.4 接続プールの設定

1. 「Domain Structure」で、Services / JDBC / Data Sources をクリックします。
2. 右側のウィンドウで「AdobeDefaultSA_DS」をクリックします。
3. 次の画面で、Configuration / Connection Pool をクリックします。
4. 「Maximum Capacity」ボックスに **30** と入力します。
5. 「Statement Cache Size」ボックスに **80** と入力します。

6. 「Save」をクリックし、「Activate Changes」をクリックします。
7. WebLogic 管理対象サーバーを再起動します。

A.3 Websphere での Solution Accelerator 用 XA データソースの作成

A.4.1 データソース用の J2C 認証の設定

データソースを設定する前に、データソース用の J2C 認証を設定する必要があります。

▶ データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、次の操作を実行します。
(**WebSphere 6.1 のみ**) Security / Secure administration, applications, and infrastructure をクリックします。
(**WebSphere 7.0 のみ**) Security / Global Security をクリックします。
2. 右側のウィンドウの「Authentication」で、Java Authentication and Authorization Service / J2C authentication data をクリックして、「New」をクリックします。
3. 以下のボックスに適切な情報を入力します。
Alias : データベースユーザーの適切な名前を入力します (例えば、AdobeDefaultSA_DS/database-databaseUser)。
User ID : ユーザー ID を入力します。この ID は、IDP_DS データソースを使用してデータベースにアクセスするためのログイン資格情報となります (例えば、db2user)。
Password : このユーザーのパスワードを入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

A.4.2 DB2 データソースの作成

A.4.2.1 DB2 JDBC プロバイダの作成

1. 自分のユーザー ID を使用して WebSphere Integrated Solutions Console にログインします。
2. WebSphere 管理コンソールのナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックします。
3. 右側のウィンドウの「Scope」ドロップダウンリストで、レベルとして「Node=NodeName」を選択し、「New」をクリックします。
4. 次のように JDBC プロバイダを設定し、「Next」をクリックします。
 - **Database type** : DB2
 - **Provider type** : DB2 Universal JDBC Driver Provider
 - **Implementation type** : XA データソース
 - **Name** : AdobeDefaultSA_DS
5. 「Class path」フィールドには、次の情報が設定されています。「Next」をクリックします。

```
CLASSPATH: ${DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH}/db2jcc.jar  
${UNIVERSAL_IDBC_DRIVER_PATH}/db2jcc_license_cu.jar  
${DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH}/db2jcc_license_cisuz.jar
```

6. 概要を確認して「Finish」をクリックします。
7. ページの最上部にある「Messages」ボックスで、「Save directly to master configuration」をクリックします。
XA JDBC プロバイダが作成されます。

A.4.2.2 DB2 JDBC XA データソースの作成

WebSphere 6.1

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「DB2 JDBC プロバイダの作成」 \(34 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「Component-Managed Authentication」および「XA Recovery Authentication」の下のリストから、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択し、「Next」をクリックします。
4. Step 2 ウィンドウで、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) で作成したデータベースのデータベース名とサーバー名を入力します。
5. 「Use this data source in container managed persistence (CMP)」が選択されていることを確認し、「Next」をクリックします。
6. Step 3 ウィンドウで、「Finish」をクリックします。
7. 右側のウィンドウで、前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースをクリックし、値を次のように設定します。
 - 「Authentication alias for XA recovery」リストで、「Specify」を有効化し、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
8. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を **80** に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
10. 先ほど作成したデータソースを選択し、「Test Connection」を選択して、データソース接続が正常に機能していることを確認します。

WebSphere 7.0

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「DB2 JDBC プロバイダの作成」 \(34 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」 で「Data sources」 をクリックし、「New」 をクリックします。
3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」 をクリックします。
 - 「Data source name」 ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「JNDI name」 ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
4. Step 2 ウィンドウで、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) で作成したデータベースのドライバの種類、データベース名、サーバー名およびポート番号を入力します。
5. 「Use this data source in container managed persistence (CMP)」 が選択されていることを確認し、「Next」 をクリックします。
6. Step 3 ウィンドウで、値を次のように設定します。
 - 「Authentication alias for XA recovery」 リストで、「Specify」 を有効化し、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Component-managed authentication alias」 の下のリストから、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択し、「Next」 をクリックします。
 - 「Mapping-configuration alias」 リストで「DefaultPrincipalMapping」 を選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」 リストで、[「データソース用の J2C 認証の設定」 \(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
7. Step 4 ウィンドウで「Finish」 をクリックします。
8. 「OK」 または 「Apply」 をクリックし、「Save directly to master configuration」 をクリックします。
9. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」 で「WebSphere Application Server data source properties」 をクリックします。
 - 「Statement cache size」 フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」 または 「Apply」 をクリックし、「Save directly to master configuration」 をクリックします。
10. 先ほど作成したデータソースを選択し、「Test Connection」 を選択して、データソース接続が正常に機能していることを確認します。

A.4.2.3 AdobeDefaultSA_DS 接続プールの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、先ほど作成した JDBC プロバイダ ([「DB2 JDBC プロバイダの作成」 \(34 ページ\)](#) の例では「DB2 Universal JDBC Driver Provider」 または 「AdobeDefaultSA_DS」) をクリックします。
2. 「Additional Properties」 で、「Data sources」 をクリックし、「AdobeDefaultSA_DS」 を選択します。
3. 次の画面の「Additional Properties」 で「Connection Pool Properties」 をクリックし、プロパティを次のように設定します。
 - 「Maximum connections」 ボックスに「30」 (または必要に応じてそれ以上の値) と入力します。
 - 「Minimum connections」 ボックスに 1 と入力します。
4. 「OK」 または 「Apply」 をクリックし、「Save directly to master configuration」 をクリックします。

A.4.2.4 デフォルトの分離レベルの設定 (DB2 のみ)

1. WebSphere Integrated Solutions Console にログインします。
2. WebSphere 管理コンソールのナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data Sources をクリックします。
3. 右側のウィンドウのドロップダウンリストから「Node=Nodename」を選択します。このノードの下のすべてのデータソースが表示されます。
4. 「LiveCycle - DB2 - IDP_DS」(JNDI 名は **IDP_DS**) をクリックします。
5. 「Custom Properties」 をクリックします。
6. 「webSphereDefaultIsolationLevel」 プロパティを検索し、このプロパティをクリックして開き、編集します。
7. 値を **2** に設定します。値 2 は「Read Committed」を表します。
8. 「Apply」 をクリックし、「OK」 をクリックします。
9. ページの最上部にある「Messages」ボックスで、「Save directly to master configuration」 をクリックします。
10. データソース **AdobeDefaultSA_DS** (JNDI 名は **AdobeDefaultSA_DS**) について手順 4 ~ 9 を実行し、デフォルトの分離レベルを 2 に変更します。
11. WebSphere を再起動します。

A.4.3 SQL Server データソースの作成

A.4.3.1 SQL Server JDBC プロバイダの作成

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Environment / WebSphere Variables をクリックし、右側のウィンドウで次のいずれかをクリックします。
 - (WebSphere 6.1) MSSQLSERVER_JDBC_DRIVER_PATH
 - (WebSphere 7.0) MICROSOFT_JDBC_DRIVER_PATH
2. 「General Properties」の「Value」ボックスに、sqljdbc.jar ファイルのパスを入力します (デフォルトの場所は [LiveCycleES2 root]¥lib¥db¥mssql)。「OK」 をクリックします。
3. 「Messages」ボックスで、「Save directly to master configuration」 をクリックします。
4. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックします。
5. 右側のウィンドウの「Scope」ドロップダウンリストで、レベルとして「Node=NodeName」を選択し、「New」 をクリックします。
6. (WebSphere 6.1) Create new JDBC provider ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」 をクリックします。
 - 「Database type」リストで「User-defined」を選択します。
 - 「Implementation class name」ボックスで、実装クラスを次のように入力します。
`com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerXADataSource`
 - 「Name」ボックスで、AdobeDefaultSA_DS と入力するか、デフォルト値 (User-defined JDBC Provider) をそのまま使用します。

7. (**WebSphere 7.0**) Create new JDBC provider ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Database type」リストで「SQL Server」を選択します。
 - 「Provider Type」リストで「Microsoft SQL Server JDBC Driver」を選択します。
 - 「Implementation type」リストで「XA Data Source」を選択します。
 - 「Name」ボックスに、**AdobeDefaultSA_DS** と入力します。デフォルトは「Microsoft SQL Server JDBC Driver (XA)」です。
8. Enter database class path information ウィンドウで、次の情報が指定されていることを確認し、「Next」をクリックします。
 - (**WebSphere 6.1**) `${MSSQLSERVER_JDBC_DRIVER_PATH}/sqljdbc.jar`
 - (**WebSphere 7.0**) `${MICROSOFT_JDBC_DRIVER_PATH}/sqljdbc.jar`

注意： WebSphere 7.0 では、WebSphere 変数 MICROSOFT_JDBC_DRIVER_PATH が設定されていると、データベースクラスパスの情報が自動的に設定されます。
9. Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。

A.4.3.2 SQL Server XA データソースの作成

WebSphere 6.1

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[SQL Server JDBC プロバイダの作成](#) (37 ページ) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. Enter basic data source information ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「Component-managed authentication alias and XA recovery authentication alias」のリストで、[データソース用の J2C 認証の設定](#) (34 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
4. Enter database specific properties for the data source ウィンドウで、「Data store helper class name」ボックスの既存のエントリを次の値に置き換えて、「Next」をクリックします。
`com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper`
5. Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。
6. 前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースを選択します。
7. 値を次のように設定します。
 - 「Authentication alias for XA recovery」リストで、「Specify」を有効化し、[データソース用の J2C 認証の設定](#) (34 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[データソース用の J2C 認証の設定](#) (34 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。

8. 「Enter database specific properties for the data source」で、データベース名、サーバー名およびポートを入力します。
9. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
10. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を **80** に変更します。

WebSphere 7.0 :

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[SQL Server JDBC プロバイダの作成 \(37 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. Enter basic data source information ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
4. Enter database specific properties for the data source ウィンドウで、データベース名、サーバー名およびポートを入力します。
5. Setup security aliases ウィンドウで、次の設定を行って、「Next」をクリックします。
 - 「Authentication alias for XA recovery」リストで、「Specify」を有効化し、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Component managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
6. Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。
7. データソースのデータストアヘルパクラスを設定します。次のタスクを実行します。
 - ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、右側のウィンドウで、作成したデータソースをクリックします。
 - 次の画面の「Data store helper class name」で、「Specify a user-defined data store helper」を選択し、既存のエントリを次のテキストに置き換えます。
`com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper`
8. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を **80** に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

A.4.3.3 AdobeDefaultSA_DS 接続プールの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、WebSphere 6.1 または 7.0 用に既に作成したプロバイダをクリックします。
 - (WebSphere 6.1 のみ) SQL Server Provider
 - (WebSphere 7.0 のみ) Microsoft SQL Server JDBC Driver
2. 「Additional Properties」で、「Data sources」をクリックし、「AdobeDefaultSA_DS」を選択します。
3. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、「Maximum connections」ボックスに **30** と入力します。
4. 9. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

A.4.4 Oracle データソースの作成

A.4.4.1 Oracle JDBC プロバイダの作成

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックします。
2. 右側のウィンドウの「Scope」ドロップダウンリストで、レベルとして「Node=NodeName」を選択し、「New」をクリックします。
3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Database type」リストで「Oracle」を選択します。
 - 「Provider type」リストで「Oracle JDBC Driver」を選択します。
 - 「Implementation type」リストで「XA data source」を選択します。
 - 「Name」テキストボックスに、**AdobeDefaultSA_DS** と入力します。
4. Step 2 ウィンドウで、デフォルトのデータベースクラスパスをそのまま使用し、「Next」をクリックします。
5. Step 3 ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。

A.4.4.2 Oracle XA データソースの作成：

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「Oracle JDBC プロバイダの作成」\(40 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. 値を次のように設定し、「OK」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに、AdobeDefaultSA_DS と入力します。
 - (WebSphere 6.1 のみ) 「Component-Managed Authentication and XA Recovery Authentication」の下のリストから、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
4. Step 2 ウィンドウで、「URL」フィールドに次の行を入力します。

```
jdbc:oracle:thin:@[server_host]:[port]:[SID]
```

[server_host] はデータベースサーバーの IP アドレス、[port] はデータベースがリスンしているポート（デフォルトは 1521）、[SID] はデータベースのサービス ID です。

5. 「Oracle 10g data store helper」を選択し、「Next」をクリックします。
6. **(WebSphere 7.0 のみ)** Setup security aliases ウィンドウで、次の設定を行って、「Next」をクリックします。
 - 「Authentication alias for XA recovery」リストで、「Specify」を有効化し、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Component managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
7. 「Finish」をクリックします。
8. 「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. **(WebSphere 6.1 のみ)** 前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースを選択し、値を次のように設定します。
 - 「Authentication alias for XA recovery」リストで、「Specify」を有効化し、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の設定」\(34 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
10. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
11. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を **80** に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

A.4.4.3 AdobeDefaultSA_DS 接続プールの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、先ほど作成した「Oracle JDBC Driver」データソースをクリックします。
2. 「Additional Properties」で、「Data sources」をクリックし、「AdobeDefaultSA_DS」を選択します。
3. **(WebSphere 6.1 のみ)** 次の画面の「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「oracle9iLogTraceLevel」を null (値なし) に変更します。
4. 「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、「Maximum connections」ボックスに **30** と入力します。
5. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。